



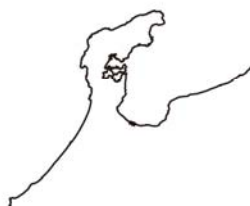


地域環境学ネットワーク

ひよこ組

能登フィールド研究会

2012 2/25・26



目次

はじめに.....	69
開催の経緯.....	70
プログラム.....	72
参加者.....	74
参加者の感想.....	76
上村真仁 沖縄県石垣市.....	76
金城達也 沖縄県国頭村.....	78
木村幹子 長崎県対馬市.....	80
一條みろ 長崎県対馬市.....	82
白川勝信 広島県北広島町.....	84
菊地直樹 兵庫県豊岡市.....	86
西野ひかる 福井県小浜市.....	89
清水万由子 長野県上田市.....	91
寺林暁良 東京都.....	94
浪崎直子 茨城県つくば市.....	96
星（富田）昇 福島県天栄村.....	98
能登フィールド研究会 振り返り Skype 会議.....	100
「ひよこ組」フィールド研究会を受け入れて —能登からのコメント—.....	104
赤石大輔.....	104
小路晋作.....	106
萩のゆき.....	108
編集後記.....	109

はじめに

この報告書は、地域環境学ネットワーク「ひよこ組」の12名が、能登半島での人材育成と地域づくりについて、学んだ記録です。

わずか2日間という強行軍で、わさわさとやってきた若者(?)たちが、何を見聞きし、何を感じ考えて帰ったか？

その一端を、まずは誰よりも能登でお世話になった皆さんにお伝えしたいと思って、この報告書をつくりました。そうすることが、学びに行った私たちが能登の皆さんにできる、唯一のお礼だと考えたからです。

研究会の開催にあたって、金沢大学能登学舎のみなさん、輪島市三井地区のまるやま組のみなさん、しいたけ小屋「ひろ吉」のご夫妻、「典座」のご主人をはじめ、地元の方に様々なお計らいをいただきました。

特に、能登学舎の皆さんにとっては、「能登里山マイスター養成講座」卒業論文の仕上げ時期に重なってしまいました。非常にお忙しいなかであったにもかかわらず、貴重な時間を割いていただいたことを、申し訳なく思いつつも、ありがたく思っております。

能登で出会ったすべての皆さんに、心よりお礼申し上げます。

能登フィールド研究会は、JST-RISTEX「地域主導型科学者コミュニティの創生」プロジェクトの一環として、地域環境学ネットワーク若手ワーキンググループ（ひよこ組）が主催いたしました。関係各所からのご支援に感謝いたします。

地域環境学ネットワーク ひよこ組
清水万由子

開催の経緯

清水万由子

◆地域環境学ネットワークとは

地域環境学ネットワークは、地域の方々と協働しながら研究を行い、地域環境問題の解決に資する研究成果を生み出す問題解決型の科学者を応援する全国的なネットワークとして、2010年3月に設立されました（代表：長野大学環境ツーリズム学部〔現 総合地球環境学研究所〕教授 佐藤哲）。地域の自然を守り活かして地域を元気にすることに貢献したい研究者と、そんな研究者との協働活動を求める地域住民の方々が、情報交流しています。

学問のための学問ではなく、社会のための学問が、環境保全の分野でももっと求められている。にもかかわらず、学問の側が社会とあまりに乖離している。研究者が、地域のことをもっと学ばなければ、地域社会のための学問にはならない。地域の方々に、研究者をもっと使いこなしてもらいたい。そうした問題意識を共有しています。

地域環境学ネットワークでは、これまでに5回の公開シンポジウムを開催してきました。いずれも、科学的・専門的な知識や技術を持って地域に住み込んで、実践的な研究と地域活動を行う「レジデント型研究者」が活躍されている地域での開催です。（「レジデント型研究者」とは「そこに住んで、地域社会の課題解決のための研究に取り組む研究者」という意味です。）

会員の経験を持ちより議論して、「地域と科学者の協働のガイドライン」もつくりました。「レジデント型研究」のための“指針”として使うもので、地域の問題解決に役立つ研究（知識生産）や、問題解決のための心構えを、いくつかの項目に整理したものです。

こうした活動を積み重ねて、地域社会のための環境学、「地域環境学」をつくっていくことをめざしています。

地域環境学ネットワーク web サイト：http://www2.nagano.ac.jp/sato/network_localscience/index.html

◆ひよこ組

「ひよこ組」は、地域環境学ネットワークの中で比較的若い世代のメンバーが集まったグループです。自分で地域に飛び込んでいくことを選び、奮闘してきた人や、これからどんな研究や活動をしていくべきか模索している人がいます。そんな若い世代同士で、夢や悩みを本音で語り合い、自分がどうすべきかを考える場をつくりたい思いで活動を始めました。2011年10月の終わりのことです。

個人的なことを言えば、研究も活動も経験の少ない私は、頭ばかりが先走ってしまい、自分の生き方やふるまいとして、「レジデント型」を受け止めきれなかったのかもしれませんが。地域に飛び込んだ若手研究者たちの赤裸々な思いを知りたいし、多くの人に知ってもらいたい。というよ

りも、「レジデント型研究」の実態は、その重要性に気付いた先輩たちの経験を受け継いで、私たちの世代が創っていくものなのではないか。そんな気負いも、少しだけありました。

◆能登に集合！

「ひよこ組」に集まった若手のメンバーは、日本列島の北から南まで、さらには海外にも散らばっています。仕事も持っています。まずはFacebook を使ったネットでの意見交換から始めました。でも、文字でモヤモヤを伝えるのは大変……。何とか顔を合わせて話をしたいと思いました。しかも、ただ会議室で話し合うのではなく、活動の現場を見ながらお互いのことを知りたい。私はほとんど迷いなく、二度訪れていた能登学舎の取り組みを「ひよこ」たちに見せたいと思いました。

その理由は、研究者が地域に住み込んで自然と地域の再生や人材育成に取り組んでいる「レジデント型研究」の1つの事例であること。しかも、地域の知恵、人、自然を活かすという出発点が非常に明確で、関わっている地域の方々がいきいきとしていること。また、能登里山マイスター養成講座がめざしている、能登の里山里海を活かした生業（なりわい）づくりは、地域に住み込む「ひよこ」たちにとっても重要な課題であること。そして食べ物がおいしいこと！！

能登の里山里海プロジェクトにはお金もかかっているし、金沢大学の地域貢献としての組織的な取り組みです。だから誰でもどこでも真似できることではありませんが、きっと具体的な活動のヒントがたくさんあるし、何より「レジデント型研究」の生の姿を間近に知ることができると思ったのです。能登でのフィールド研究会を提案したところ、赤石さんに受け入れていただき、開催できることになりました。

テーマは「レジデント型研究とは？」。次のような点を切り口に、能登での取り組みから学びたいと考えました。

- 地域社会の一員としての研究者の役割とは？（研究者から見て）
- 地域に研究者が常駐することの意義とは？（地域に暮らす人々から見て）
- 地域と研究者の協働のための組織・ネットワークづくりの方法
- 地域で暮らす人々が求める「学び」とは？

2日間という短い期間でしたが、能登の風景、人との出会いに、参加者一同多くの刺激を受けました。そして、それぞれが改めて自分自身のことや自分が暮らす地域のこと、「レジデント型研究」のことを、考える機会となりました。

プログラム

2月25日(土)

12:00-13:00 金沢大学能登学舎内「へんざいもん」で昼食

ご飯 かじめとあおさの粕汁 若鶏の照り焼き
けんちん おから にんじんの粕和え
たくあんの贅沢煮 酢の物 大豆の五目煮 漬け物



研究会(1)

13:15-13:30 開会挨拶・趣旨説明(清水万由子)

13:30-14:00 NP0 おらっちゃんの里山里海の活動(赤石大輔氏)

14:00-14:30 能登里山マイスター講座の活動
(小路晋作氏ほか、講座専任スタッフのみなさん)



14:30-15:30 能登学舎周辺の保全エリア見学

15:30-17:30 ひよこ組参加者の活動紹介・議論

17:30-19:30 懇親会 典座

20:00～ 農家民宿しいたけ小屋ひろ吉で議論つづき、宿泊



2月26日（日）

9:00-10:00 珠洲市を出発して輪島市三井へ

10:00-12:30 まるやま組アエノコト参加

12:30-13:30 まるやま組ランチ

研究会（2）

13:30-14:00 まるやま組の活動紹介
（萩野由紀氏）

14:00-14:30 まるやまの景観変遷
（農村工学研究所・栗田英治氏）

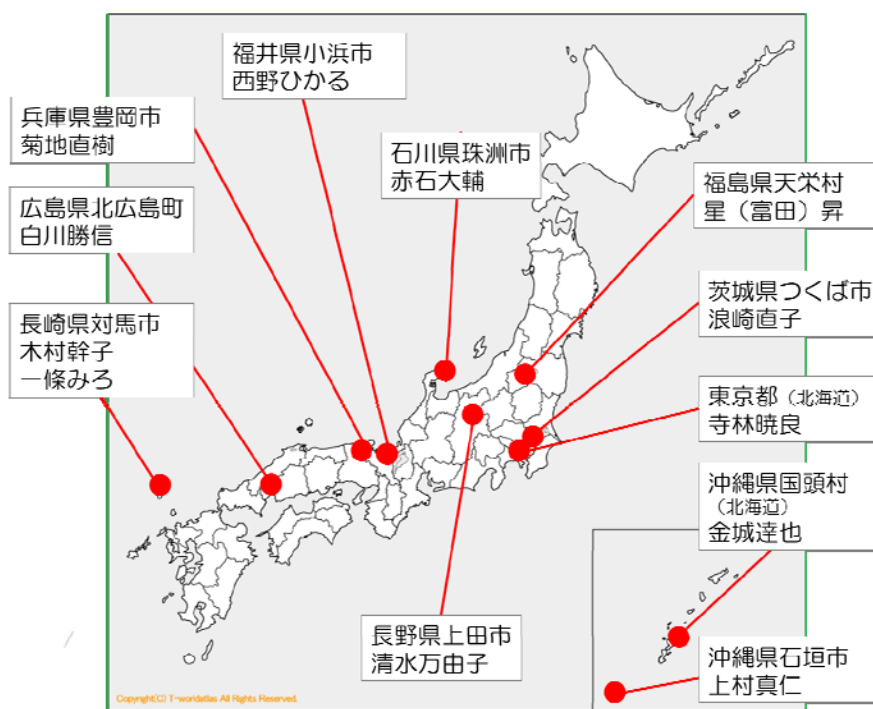
14:30-15:00 ひよこ組から一言ずつ

15:00-16:00 議論

16:00-16:30 解散



参加者



（～南西から東北へ～ 所属は開催当時のもの。感想を一部抜粋しました。）



上村真仁（かみむら まさひと） 沖縄県石垣市
白保魚湧く海保全協議会 事務局長、WWF サンゴ礁保護研究センター センター長
——地方で豊かな生活文化を受け継ぎながら、普通に暮らすことの出来る社会システムや社会的な価値観の醸成、生活基盤の整備が必要だと思いました。



金城達也（きんじょう たつや） 沖縄県国頭村
北海道大学大学院文学研究科博士後期課程
—— 研究者と地域社会との関係の持続性を担保するものの必要性を考えさせられました。



木村幹子（きむら もとこ） 長崎県対馬市
対馬市島おこし協働隊 生物多様性保全担当
——研究者の側に、どういう地域への関わり方が一番良いのか、という正解はない気がしました。むしろ、地域側に、「研究者をどう利用したいか」という議論が必要だと思います。



一條みろ（いちじょう みろ） 長崎県対馬市・
対馬野生生物保護センター 普及啓発・地域社会づくり担当
—— 「先生」だからこそ出来る事と、もっと地元に近い「やまねこさん（若しくはみろちゃん）」だからこそ出来る事とは違って、どちらの存在も大切なのではないかな



白川勝信（しらかわ かつのぶ） 広島県北広島町
芸北 高原の自然館 主任（学芸員）

——里山マイスターのとりくみはとても魅力的で、異業種分野の人達と認識を共有する方法として、一つの理想型だと思います。



菊地直樹（きくち なおき） 兵庫県豊岡市
兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立コウノトリの郷公園 講師

——能登で沢山見たのは、「でもある」という「半」だったのではないかな。



西野ひかる（にし の ひかる） 福井県小浜市
アマモサポーターズ代表／京都大学地球環境学舎修士課程）

——「能登はやさしや土までも」本当に目に見えない、言葉で表せないたくさんものをいただいたように思います。



赤石大輔（あかいし だいすけ） 石川県珠洲市
NPO 法人能登半島おらっちゃんの里山里海 研究員

——地域に入り活動する我々は、どこまで研究者としていられるのか、どうすれば新しいものを創り出せるのか、議論の最中である。



清水万由子（しみず まゆこ） 長野県上田市
長野大学 研究員

——能登で出会った皆さんと、その後ろにいるであろう多くの人々の姿を想像しながら、レジデント型研究というチャレンジが、ますますおもしろくなってきました。



寺林暁良（てらばやし あきら） 東京都
農林中金総合研究所 研究員／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

—— 「能登のストーリー」はどのくらい共有されたものなのかなあ。それを社会調査でぜひとも見えるものにしてみたいなあ。そんなことを考えていました。



浪崎直子（なみざき なおこ） 茨城県つくば市
国立環境研究所

—— この金沢大の取り組みが地域にどのようなインパクトを与えたかが見えると面白いなと感じました。



星（富田） 昇（ほし とみた しょう） 福島県天栄村
東北大学大学院環境科学研究科新妻研究室

—— 地域資源をうまく活用したなりわいを、持続可能な形で創出し、若者が住みたいと思う地域、帰って来たいと思う地域にしていくことが重要

参加者の感想



上村真仁（かみむら まさひと） 沖縄県石垣市

白保魚湧く海保全協議会 事務局長、WWF サンゴ礁保護研究センター センター長

◆参加前の期待

私は、WWF ジャパンという自然保護団体に勤務し、沖縄県石垣島に暮らしています。仕事では地域主体のサンゴ礁保全が目標ですが、自分自身では持続可能なコミュニティづくりをテーマとしています。

現在、「里海」というキーワードで、地域が自主的に健全なサンゴ礁と調和した持続可能な暮らしを営み、満足度の高い暮らしの実現に取り組んでいます。現在直面している課題の一つが、地域でのコーディネーターの育成です。

能登フィールド研究会の案内をいただいた際、金沢大学能登学舎ではどのような活動をしているのか、里山マイスター養成プログラムとはどのようなものか大変興味を持ちました。また、それらの働きかけを受けて地域の人々がどのように感じ、参加し、地域の生物多様性保全と地域活性化に取り組んでいるのか実際に見てみることで、石垣島白保での参考にしたいと考えていました。

○地域外からきた組織が地域にどのように受け入れられていくか？

○地域の人々を巻き込み、持続可能な地域づくりを促す、カリキュラムってどんなものか？

○地域の人々が生物多様性をどのように解釈し、その保全、活用に取り込んでいるか？

◆能登の取り組みを見て

当初の3つの関心は、研究会の期間だけでは把握しきれませんでしたが、多くのことを考え

るきっかけとなりました。主に、自分にとって地域と関わり続けることの意味とは何か？、そして、いかに生きるかという問題です。下記に3つについて感じたことをまとめ皆さんと共有したいと思います。

●研究者の皆さんの厳しい現実とレジデント型研究者がレジデントであり続けるために

これまでも地域環境学ネットワークの様々な集まりで、レジデント型研究者の皆さんが継続して地域に関わり続けることの難しさが話題になりました。研究拠点の目的と地域との関わりの方性の乖離や、財政的な問題、異動の問題などレジデント型研究機関の問題と、研究業績を上げることが難しいことやライフステージの変化によりその地域に住み続けることが難しくなることなどもあります。

金沢大学能登学舎は、大学の施設なので継続した取り組みが担保されているのではと想像していましたが、実際には有期限のプロジェクトで回っているため研究員の皆さんの雇用が安定していないことから継続して地域と関わり続けるためのレジデントのあり方にやはり課題があるのだと思いました。

一方、天栄村の星さんのお話を聞き、研究者の資質を持つ人が地域の生活者として自らの住む地域に関わり続ける方法や対馬の木村さんのように研究ではなく、持続的な地域づくりの実践のため、自身の豊かなライフスタイルの実現のために地域に入られる姿を目の当たりにし、研究者の人生の選択の多様性を興味深く

感じました。

●「へんざいもん」のコンセプトに感動！！

能登半島里山里海自然学校で最初に入った薪ストーブのある部屋に CBD-COP10 のための展示がありました。そこに「食から里山里海を感じる へんざいもん」というコピーがありました。これは 2004 年に私が白保に入って、最初に始めた“白保郷土料理研究会”からその後の“白保日曜市”に続くコンセプトと非常に似ています。

当時、WWF の中でサンゴ礁保全と郷土の食文化や生活文化の繋がりを理解してもらえず(私の説明が下手だったのかもしれませんが・・・)苦勞したことを思い出しました。自然豊かな地域にいれば当たり前のこと(往々にして、自然の価値に地域の方が気付かないことをこのように言いますが)、自然を大切にしながら暮らしてきたことを、都会にいる人が見落としてしまっている(そもそも人は自然から様々な恩恵を受けて生きていること)のかもしれないね。

地域の人々に生態学的な知見を伝えること、地域の中に既にある保全的な生活のあり方を受け継ぐことの大切さ(私は地域の皆さんが寄り多くの方々に参加してもらうためには特に後者が有効だと思います)を改めて感じました。さらには、都市に住む人たちに持続可能な暮らしを伝えるための田舎の役割、可能性についても強く感じました。

しいたけ小屋の朝食、アエノコトの際の郷土料理もいずれも能登の自然の恵みをたっぷりといいただくことが出来ました。

こうした豊かな資源を収入につなげるということをついつい考えてしまいましたが、本当にすべきことは地方で豊かな生活文化を受け継

ぎながら、普通に暮らすことの出来る社会システムや社会的な価値観の醸成、生活基盤の整備が必要だと思いました。

●現代版アエノコトにびっくり！！

I ターンについて自分の中で明確な考えが整理できていません。私が地域に関わるのは専門家と



してであり、最大で選択肢の提示のみ、選択権は地域の人たちにあると考えてきました。地域の内発的な取り組みとなるよう、地域が気付き、自然に向かうよう、情報を提示し、ヒントとなる事例の提示や講演会をお膳立てするように努めてきました。それは、WWF という組織と白保集落との歴史的な関わりの中で生まれた負の関係性(新石垣空港問題への立場の違いによる乖離)を意識したことでもありますが、持続的な地域づくりの担い手は、地域の人々だという考え方、私自身は地域の間人ではない、いずれここを去るという潜在的な考えがあり、距離感が出来ているのかな？と思いました。

研究や仕事の対象として地域をみる見方と地域に骨を埋める覚悟で地域に関わる違いについて考えさせられました。

地域環境学ネットワークとしては、研究者が地域に関わり続ける、地域の環境改善に関わり続けようとする目的、意味は何なのかということ掘り下げる必要があるかもしれませんね。

ただ、白保集落は過疎、高齢化とは無縁の集落であり、伝統行事の担い手もいるので、同じような取り組みをするのは難しいだろうと、ある意味うらやましく思いました。



金城達也（きんじょう たつや） 沖縄県国頭村
北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

地域環境学ネットワーク若手グループ（通称：ひよこ組）の研究会参加のため、人生で初めて能登に行くことができました。研究会は2月25-26日の二日間行われました。一日目は能登学舎の活動紹介と地域環境学ネットワークメンバーのそれぞれの活動報告がありました。

能登空港から能登学舎へ移動し、到着後は早速食堂で昼食をとりました。どうやら能登半島里山里海自然学校のテーマのひとつに「食文化の保存と地産地消の食育推進」があるらしく、女性メンバーが中心となって地域で採れた食材を中心として料理をふるまっていました。こういう活動を生み出させ支えていくためにも能登学舎の存在は大きいと感じました。

昼食後は早速研究会が始まり、能登学舎の取り組みや地域環境学ネットワークメンバーそれぞれの地域での活動報告がなされました。能登学舎の取り組みでは研究者複数名が中心となり、地元住民を対象にマイスター養成講座を行うなど、研究者の地域社会での役割を感じさせてくれるものでした。実際に地元住民と一緒に生物調査を行うなどして地域資源を掘り起こす活動を続けており、研究者と地域住民の関係の双方向性を感じさせてくれるものでした。また、能登学舎のみなさんからは研究者のポストの問題や活動の継続性に関する不安も感じ取ることができました。それらの問題は博士課程に在籍するものとしては考えざるをえない問題でもあるし、なによりも研究者と地域社会との関係の持続性を担保するものの必要性

を考えさせられました。そういった関係性を築くことができなければ結局のところ研究者は「いつかこの土地を出ていく者」としての認識が強くなるだろうと思いますし、地域社会とのかかわりの持続性は保証されず、これまでの活動がいくら素晴らしいものであっても無くなってしまうものになってしまうと思いました。もちろん活動自体が地域社会によって継続される場合もあるとは思いますが、継続されない場合にはレジデント型研究者の役割も薄らいでいくもののように感じました。

私のもうひとつの肩書きとしては地方自治体の文化財行政にかかわる立場があります。鹿児島県徳之島天城町の文化財系皆調査の専門員をしていますが、その立場からは二日目にお世話になったまらやま組の活動は大変興味深い取り組みでした。「現代版」とはいっても、地域の方から方式などを教えてもらいながらアエノコトを実践として行っている様子は地域の文化を存続させていくうえでは重要なことであるように感じました。

アエノコトはまず自宅で神様を労うことから始まりました。その後、田んぼの神様を実際に田んぼに返すため、参加者全員で雪道を歩きながら田んぼへと向かいました。慣れないスキー板を装着して雪道を歩くのは大変でしたが、沖縄出身の僕にとってはそういう些細なことでもすごく楽しく感じました。田んぼに到着すると神様を田んぼに返す儀式を行いました。儀式を終えて萩野さんの自宅に戻ると地元で採れたたくさんの食材を



活かした料理
で昼食をとり
ました。昼食後
はまるやま組
の活動報告な
どを中心とし

た発表があり、その後はみんなで親睦を深めました。

この一連の流れを淡々と書いてみても、その中には地域の人や外部の人などさまざまな参加者がいることがわかります。ひとつの行事を内輪だけでは終わらせないようなまるやま組の活動は文化や環境の持続性に貢献できるものではないかという可能性を感じました。

今回の能登フィールド研究会ではたくさんの方の事を勉強させてもらいました。自然環境のことからはじまり、文化のこともそうですし、それらを含めて地域社会の持続可能性のこともいろいろ考えさせられるものでした。今回は二日間という短い時間だったのでまだまだ聞けてないところもたくさんあると思います。能登学舎やまるやま組にかかわるみなさんがすべてを説明できたとも思え

ません。このことを言い訳にしてまた能登フィールドを訪れる機会になればと思います。その際にはぜひもう少し踏み込んだ形で能登学舎の取り組みやまるやま組の活動などと地域社会とのかかわりについてお聞きすることができればと思います。そこから能登学舎の活動と地域社会のつながりや関係性がどのようなものであるのかを考えてみるのも良いのかなと思いました。能登学舎の活動で行っている生物調査などに加えて、機会があればぜひそのような社会科学的な調査をやるとおもしろいのではないかと考えました。

最後に、今回の地域環境学ネットワークメンバーのフィールド研究会を受け入れてくださるにあたりコーディネートしていただいた能登学舎のみなさんや宿泊場所を提供していただいた農家民宿のおじさんとおばさん、さまざまな活動紹介をしていただいたまるやま組のみなさんには大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。またお会いできることを心より望んでおります。



木村幹子（きむら もとこ） 長崎県対馬市
対馬市島おこし協働隊 生物多様性保全担当

私は、昨年6月に、これまでの研究者人生にひとまずの区切りを付け、生態学者として歩んで来た自分の経験を実社会に活かすフィールドを求めて、対馬に移住しました。研究員時代、私が携わっていたプロジェクトでは、「生態系適応科学」という新しい学問大系の構築を目指していました。これまで人類は、変動する自然環境を力で押さえ込むことによって克服し、発展してきました。生態適応科学とは、自然を克服するのではなく、生物や生態系が本来備えている適応力を活かして変動する環境に適応していく「適応型社会」を実現するための科学です。適応型社会の実現には、生態系のメカニズムを解明する基礎研究だけでは不十分で、社会に浸透するシステムを作る必要があります。研究員時代に強く感じたのは、生物多様性の問題はまさに地域の合意形成や経済の問題だということです。理論を体系化し、学問の世界で提唱して行くことも、確かに大事なことだし、大きな影響力を持つことでしょう。でも自分は、小さな単位でも良い、どこか現実の社会で、「これが適応型の社会です」ということを示すモデルを作って実践してみたかった。そのほうが、自分の生き方として無理がないな、と感じていました。そんなとき、対馬市では、総務省の地域おこし協力隊の制度を活用して、「地域の自然資源を保全し、活用することで地域野活性化につなげる」ことを仕事とする専門職員を募集していました。これだ！と思って、対馬に渡ることとなりました。

対馬は、ご存知の通り離島です。つまり非常に単位が明確なわけです。「実験場」として最適ではないかと。エネルギーの自給自足

や地域内での物質循環を実現するプロセスやその経済性、地域の合意形成の過程、そういったことを研究するフィールドとして活用できるのではないかと。私は、そういったフィールドを求めている研究者を対馬に集め、知見を吸い上げ、実際の社会に活かすしくみを作るコーディネーターになるべきなのだと思います。ですから、この能登フィールド研究会では、特定の地域をフィールドとして活動する研究者の方が何を求め、どのように地域と関わっているのかを知り、今後、どのように研究者と関わって行くのかのヒントを得たいと思って参加しました。また、研究者にとってよい「実験場」であることは、学習者にとってもよい「教材」であることと同義です。そういう意味で、金沢大学が実践しておられる「里山マイスター養成プログラム」は、大変興味がありました。

以下に、研究会を終えての感想を記したいと思います。

◆研究者の存在が地域にとって有意義なものとなるには

星さんのように、結婚しちゃって自分で自分の稼ぎ口をつくっちゃって、もう、この地で生きます！という人がいるということは、私にとって非常に励みになりました。また、赤石さんや上村さんのように、研究者が一人の住民となって、住民との直接対話が出来、住民とともにプログラム作りが出来る体制が構築されていることも（そのような人がいることも）、地域にとっては大きなメリットだろうと思いました。しかし学問として地域に関わることには、ある程度ドライな関係をあ

えて保つ必要があることもあるし、複数の地域に関わる必要があることもあるでしょう。研究者の側に、どういう地域への関わり方が一番良いのか、という正解はない気がしました。むしろ、地域側に、「研究者をどう利用したいか」という議論が必要だと思います。一時的にしか滞在しない研究者や、調査フィールドとして、データのみを必要としている研究者が持っている知見も、地域に還元してほしいと地域が望んでいるのならば、地域側が窓口や受け皿を整理すべきなのだろうと思いました。

◆里山マイスター養成プログラム

講師陣やカリキュラム、フィールド、すべてにおいて、非常に理想的なプログラムで、このような学習フィールドが全国で展開されれば、もっと世の中は良くなると思いました。同時に、民間では真似できない。。。とも思いました。教育のための予算として、公的なお金がかなり投入され、大学という組織の職員として専門的にこれに関わることでできる人材が確保できる。このような条件を整えることは並大抵のことではないとは思いますが、しかし、ヒントになるところは大いにありました。

たとえば、対馬のような離島では、「通い」で教育プログラムを展開するのは不可能ですが、逆に長期滞在型ならば離島という立地はハンディではなくなります。毎週土曜日の開講日ではなく、1年間の住込み研修にしまえば、カリキュラムの応用は可能ではないかと思いました。そのことで、制限要因になっている専門的にかかわる職員の不足を、その役目を受講者自らが担うという形で補えるかもしれません。住込みならば、衣食住を保障すれば、受講料を払っても受講したい

と思う人もいるでしょう。また「へんざいもん」のコンセプトには、非常に学ぶべきところが多く、その土地で「普通に」食べているものこそ、遠くからでも食べにやってきたいと思うご馳走であり、地域特有の知恵が詰まっています。これも、受講者に提供する食堂という形態ではなく、伝統食材の調理自体を学びのカリキュラムに組み込めば、離島でも応用可能なような気がしました。ということで、すごい！→でも、対馬ではムリだ。。。→いや待てよ！？と考えることで、「盗む」ことができるアイディアは、たくさんありました。

◆まるやま組の「アエノコト」

地域の信仰は、その土地の自然をその土地に住む人々がどうとらえ、どう付き合ってきたのかを示す非常に重要な資料なので、生物多様性を保全すると同時に、こういった信仰の多様性を保全していくことの重要性を感じました。対馬でも伝統的な信仰は地域ごとに様々ありますが、どの地域でも頭を悩ませているのが担い手の高齢化と後継者不足です。とにかくその土地に昔から住んでいる人は、そういったものを当たり前すぎて、逆に「わずらわしいもの」と捉えがちです。まるやま組の取組のように、「よそもの」がそこに価値を見出し、逆にその価値を地元の人に気付かせるような、そんな存在がいるかいain かが、信仰の存続の可否を左右するような気がしました。





一條みろ（いちじょう みろ） 長崎県対馬市・
対馬野生生物保護センター 普及啓発・地域社会づくり担当

「地域環境学ネットワーク」の「研究会」に参加していながら、実は私は「研究者」ではありません。農業高校を出て、農林大学校や環境の専門学校で勉強した後、長崎県の対馬という離島で、ツシマヤマネコをはじめとした対馬の自然の面白さや、研究者の皆さんの成果を子供たちや一般の人に伝える、「インタープリター」（自然案内人）という仕事をしています。

今回は、ツシマヤマネコと共生する地域社会づくりに取り組む中で、地域の方との活動のヒントを得られないかと考え、研究会に参加させて頂きました。このレポートでは、1泊2日の研究会で、私が学び、感じた事を書かせて頂きます。

能登学舎の取組は以前から知っており、地元の方と大学がどのように関わりあっているのか、非常に興味を持っていました。お昼を頂いた「へんざいもん」では、地元のお母さん達が地元の食材「辺採物」を使って本当に美味しい地元ならではの料理を出して下さいました。黒板のメニュー、室内のディスプレイ等、空間のあちこちにお母さんたちの心遣いが感じられる素敵な空間でした。地元の食材、人材の活用だけでなく、地元の魅力を来訪者に伝えることが出来る、非常に良い取組だと感じました。

昼食後に行った、マツタケ山の見学も、非常に面白かったです。能登ではゲンゴロウ類が自然の豊かさを図るモノサシになっていましたが、地元の人にとっては、居るのが当たり前、種類の違いなんて気にしていないであろうゲンゴロウの保全を行うまでには、能登学舎の研究者の皆さんの知識、データ、伝える努力（これが一番重要だと考えています）が多々あった

事だろうと想像しています。反対に、マツタケが取れる山を目指しているアカマツ林では、地元の方の経験談から、サカキ（能登での呼び方で書かせて頂きます）を優先的に残すことがマツタケの発生しやすい森を作り、サカキの枝は香花として出荷している…という事で、地元の方の知恵と、研究者の知識がうまく合わさっているのを感じました。

交流の場として用意して頂いた囲炉裏が印象的な立派な古民家「典座」さんでは、日本海ならではの海の幸を頂きました。料理はどれも美味しかったのですが、一番印象に残ったのは、「いしる」を使ったおにぎりでした。「へんざいもん」の粕汁（カジメ、アオサ入り）、「ひろ吉」さんで頂いた椎茸「能登115」に「大浜大豆」を使ったお豆腐、「まるやま組」のアエノコトでの直会のごちそう達…能登の皆さんが暮らしの中で地産地消を実践し、自然の営みをうまく活かしている一端を感じることが出来ました。

「ひろ吉」さんのお父さんが「生物多様性なんて全く興味はない。赤石先生が一生懸命シャープゲンゴロウモドキやカエルの調査をするから大事なのかな、と思うようになり、手伝うようになった」…というお話をされていたのが非常に印象的でした。

赤石さんは能登では「先生」と呼ばれており、それが地域との隔たりであるかどうか…という話にもなりましたが、「先生」だからこそ出来る事と、もっと地元に近い「やまねこさん（若しくはみろちゃん）」だからこそ出来る事とは違って、どちらの存在も大切なのではないか、という考えに落ち着きました。

能登学舎に関わる人たちにとっての「シャープ」が大手家電メーカーではなく、小さなゲンゴロウを指す言葉になっていたのが面白く、それだけゲンゴロウが身近なものになっているという事なのだと感じましたが、これは「先生」である赤石さんや能登学舎の皆さんが地元の人にシャープゲンゴロウモドキの価値を伝え、それを能登の人達が理解した結果なのだと思います。

現在、対馬では「ツシマヤマネコと共生する地域社会づくり」として、3つの地区で人もヤマネコも住みやすい地域づくりを行っていますが、能登の地元の自然を活かしたおもてなしの心は、対馬でも応用できるものだと感じまし

た。対馬の地元の人達と、今回の研修の内容を共有し、対馬ではどんなことが出来るのか、「やまねこさん」なりに、地元の人達と一緒に考えていきたいと思います。

赤石さん、清水さん、能登で受け入れてくださったすべての皆様、貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。





白川勝信（しらかわ かつのぶ） 広島県北広島町
芸北 高原の自然館 主任（学芸員）

2012年2月24日に珠洲市保全計画策定協議会、25日と26日には「地域環境学ネットワークひよこ組」の研究会に出席するため、能登を訪れました。金沢大学の「能登半島里山里海自然学校（以下、自然学校）」の事業については、情報として知ってはいたけれど、詳しく聞くのは初めてでした。3日間の滞在では、研究者の資質も、地域力もとびきりだということが分かり、たくさんのアイデアと視点とごちそうをいただきました。一方で、地域に根付いた研究施設を持続することの難しさも実感できました。

地域環境学ネットワークの研究会で各地を訪れる時には、「どのようなしくみが、どのようにして、その地域に組み込まれているのか」という視点でお話を聞いています。今回も、自然学校の活動を推進させているしくみ、それを実現させているもの、そして、他の地域（まずは自分の地域）に応用するために越えなければならないハードル、について、ずっと考えていました。それらを整理するために、簡単なメモとして残したいと思います。

◆自然学校が実現させる「主流化」

自然学校のホームページを見ると、そのめざすものは「身近な自然である里山や里海の保全と再生」および「環境に配慮した農林水産業を基盤とした地域振興策を提言」する、とあります。半自然生態系の保全を持続するためには、担い手の確保が最大の課題です。ボランティアによる保全も一時しのぎには有効ですが、持続性がありません。

今回、最もおもしろいと感じたのは、「里山マイスター」という事業を通じて、担い手自身

が地域振興策の提言をする仕組みになっていることでした。里山マイスター研修の最後には、卒業論文発表会という形で各自が発表をするのですが、「発表」を作り上げる作業を通じて、受講者は、里山・里海を保全するために何をするかということを考える「姿勢」を身に付けることになります。単なる技術の継承で終わらせないことは重要と感じました。

また、マイスター認定を受ける主体の業種が多様ということもポイントだと思います。卒論発表という形で、里山・里海との関わりについて自分の姿勢を発表することは、ある意味「決意表明」のようなものだと思います。その課程を経た人達が、地域のあらゆる分野にいる、ということは、生物多様性戦略で言うところの「主流化」を進める上で、大きな力になるはずです。人口約7万3千人の奥能登で約60人のマイスターは、決して少なく無いと思います。

◆金沢大学の存在

自然学校のスタッフは、地域の人から「先生」と呼ばれており、里山マイスターが課程を修了する際の発表会が「卒論発表会」と名付けられていることから、自然学校が「アカデミック」（学問的）を意識していることが伺えました。ただし、先生は「遠い存在」ではなく、一緒に何かをやってくれる仲間として人間関係を築いていることは、民宿やへんざいもんの方たちとの話しを通じてよく分かりました。先生としての立ち位置を保ちながら、地域の人との人間関係を築いていくのはとても難しいことです。

委員会や方針決定の場で、大学の先生、いわゆる学識者の発言が必要になる場面がありま

す。それは科学的な裏付けが求められることよりも、むしろ、理屈や、地域の人間関係や、行政の都合などを飛び越えた、上からの意見です。

「先生がそう言うのなら」ということで、進む話もあります。それは、個人への信頼とは少し違うもので、大学という名前によって担保されるもののように感じます。マイスターが卒業するときに、安心と信頼を持つためにも、大学の存在は必要だと思います。

この雰囲気は、地方の博物館に務める学芸員や、地域環境学ネットワークを通じて訪れた（大学以外の）レジデント型研究施設のスタッフと地域の人との間には、そんな関係は感じられませんが、兵庫県立人と自然の博物館の学芸員やコウノトリの郷公園のスタッフには、共通のものがあるように思います。博物館施設でも、もちろん研究活動は進められており、地域の人との関係は個人の資質によって作られるのですが、地域の人や受講生からの「見た目」を担



保することに関して、大学の存在が大きいことを、今回の研究会で強く感じました。

◆能登での収穫

自然学校そのものの存続が不透明なことについては、とても残念に思います。今居られるスタッフは有能であり、人間性もすばらしいことは、地元の話でよく分かりました。自然学校があることの価値を、地域や行政が実感する時が、自然学校が無くなってからではいけないと思います。短期間の間に、他の自治体が実現したくてできていない多くのことを、自然学校は実現させています。金沢大学や珠洲市には賢明な判断を期待したいと思います。

里山マイスターのとりくみはとても魅力的で、異業種分野の人達と認識を共有する方法として、一つの理想型だと思います。自然学校と同じことはできませんが、今後、活動を進める際の重要な視点を教わりました。また、大学との連携について、研究や活動以外の利点を感じられたことも収穫でした。北広島町では、2012年に生物多様性地域戦略が策定される予定ですが、戦略を推進する上で、組織の運営・大学との連携・事業実施など、多いに参考にさせていただきたいと思います。



菊地直樹（きくち なおき） 兵庫県豊岡市

兵庫県立大学自然・環境科学研究所／兵庫県立コウノトリの郷公園 講師

◆僕の履歴

まだ「レジデント型研究」という言葉が生まれていなかった 1999 年、僕は兵庫県立コウノトリの郷公園（本務は兵庫県立大学自然・環境科学研究所）に赴任しました。仕事は環境社会学に立脚しながらコウノトリの野生復帰プロジェクトを推進していくこと。舞台は兵庫県北部の豊岡市。初めての土地で、周りは自然科学者や行政マン、自然大好きな人間ばかり。若くて頭でっかち、そして人見知りだった僕は、この地でどんな仕事ができるのか、不安な日々を過ごしました。

ある日、「お前を採用して失敗だった」と当時の上司が吐露しました。今となっては、その心意は分かりませんが、もっとアクティブに活動し、人々の意識や行動を変えていくことを僕に期待していたのでしょう。内気な僕は、人を元気づけたり鼓舞したりするのが、あまり得意ではありません。どちらかというと、人々の声を聞き、理解しようとすることから、人と自然の関係を再創造しようと考えていたのです。このアプローチは回りくどく、時間がかかり、分かりにくい。それでもコウノトリの話を知りたいと思い、地域を歩いて回る日々を続けたのです。

このコウノトリの話を知る仕事は、僕の野生復帰へのかかわり方や研究者としてのあり方に決定的な影響を与えました。この地で生まれ育ち、そして死んでいく人たちの話を聞くことを通して、人とコウノトリの共生や地域づくりがリアリティを持って目の前に現れ、豊岡に住みつくことを通じて野生復帰に取り組むようになったと思うからです。それ以降、研究者と行政スタッフと地域住民といった複数の視点を交錯させることが、僕のスタイルになりました。

た。

地域環境学ネットワーク代表の佐藤哲さんが、豊岡で開催した環境社会学会第 37 回大会のシンポジウムの壇上でレジデント型研究という言葉が披露したのは、2007 年のことです。言葉が提示されたことで、少し違った視点から見ることができるようになり、各地で地域に住みつきながら研究と活動をしている人たちの存在を知る機会が随分と増えたのは確かです。言葉の力は大きいと実感しています。

◆初めての能登訪問

レジデント型研究という視点で見渡すと、似た取り組みをしている地域が幾つも目につきました。なかでも金沢大学能登学舎の里山マイスターの取り組みが気になりました。過疎化に悩む能登半島で、若い研究者が住みこみながら、地域の担い手となるべく若者の定住を目指したプロジェクトを展開している。豊岡市がある但馬地方も同じ問題を抱えているので、現場を見てみたいと思ったのです。同じ石川県の片野鴨池総合研究会で一緒したことがあるプロジェクトリーダーの中村浩二先生に、早速連絡を取ってみました。輪島高校での講義を頼まれ、赤石さんとともにコウノトリのこと、能登の里山のことなどを高校生と話し合いました。大雪の中、赤石さんに千枚田や能登学舎などを案内してもらい、「ひろ吉」で能登の現状と将来を深夜まで語り合いました。告白しますが、僕はしいたけが苦手です。そんな僕にも暖かく接してくれたひろ吉さん、とても感謝しております。初めての能登訪問でした。2010 年 2 月のことです。

◆ひよこ組の一員として

とても「ひよこ」と自称できる年齢ではないのですが、「老ひよこ」ということで、組の一員として再び能登を訪問させていただきました。

人々のもてなしは、やはり素晴らしいものがありました。「食から里山里海を感じる」という「へんざいもん」、古い民家で地域の普通のものを提供する「典座」、夫婦の笑顔が素敵な「ひろ吉」、豊富な田舎料理を振舞ってくれた「まるやま組」。どこも地域の自然の恵みを感じることのできる、素晴らしい料理、空間です。何度でも訪れたいと思ったのは、僕だけではないでしょう。こうした地域の恵みを活かす活動は、科学の目から地域に光を当てた能登学舎によって触発されたのではないかと勝手に推測しています。

都会から移り住んできた人たちが、地域の伝統を新しい形で継承していく現代版の「あえのこと」。萩野さんのお家に色々な人々が集まって、神様に感謝し、地域の恵みをいただく。とても不思議な居心地の空間でした。カラフルなアウトドアウェアを着た人たちが雪道を歩く姿に、ハイブリッドな伝統文化が生まれる瞬間を目撃したのかもしれません。

地域の担い手の育成を目指した里山マイスターの取り組みは、既に色々なところに効果が表れているようです。「先生」と呼ばれる若き研究者たちは、確実に地域の人たちに多くの刺激をもたらすとともに、地域の人から可愛がられているに違いありません。地域のヘソのよう



な存在である学校がなくなる。この問題に対して、能登学舎は一つのモデルを提示しています。若い

研究者が住みつき、おばあちゃんたちが出入りする。違った履歴をもった異世代が交流することで、地域のヘソが再生しているかのようでした。豊岡でこのような活動がどうしたらできるのか、考えを巡らせていました。

是非とも里山マイスターは継続してほしいのですが、多くの困難があることも分かりました。資金の切れ目がプロジェクトの切れ目になるかもしれないこと。スタッフが不安定な身分であること。伊藤さんが問いかけた、「幸せって何だろう」という言葉に象徴されているかもしれません。地域の人々と若きスタッフたちが、どのようにかわり、相互に変わっているのか、そのことがとても気になったのです。

◆レジデントと研究

これまで地域環境学ネットワークのシンポジウム等で、レジデント型研究者が継続的に

地域にかかわり続けることの困難さやレジデント型研究とは何かということが幾度となく話題にあがりました。レジデントと研究。この二つが必然的につながるわけではないでしょう。二つの言葉をつなぐものは何か？ここ数年、自問してきました。

ここでいうレジデントとは、主によそから移り住むという意味で使われています。住むとはどういうことでしょうか。今回の能登訪問では大雪に見舞われました。数日訪問する者にとっては、きれいと感じるかもしれません。大変だという感想を持つかもしれません。先日、北海道で「雪かきがある地域とそうでない地域では文化が違う」という言葉を聞きました。四国で生まれ育ち、積雪地帯に住み移った僕には、この言葉のニュアンスをそれなりに理解できます。日常としての雪を経験していると、「ここに住むってこういうことだろう」と、まさに身体的に理解できるようになることがあるのです。豊岡の夏は40度近くまで気温があがり、

油断していると何でもカビが生えてしまうほど湿度が高い。10年に1回程度は、大きな水害に見舞われ、2004年には我が家も床上1メートルの被害にあった。そうしたところだからこそ、生物が豊かでコウノトリが生息できる。

地域に身体を埋め込むことと科学の視点を交錯させることにより、地域の課題や将来の選択肢を見据えた知識を創ることが、研究者がレジデントになることの意義の一つではないでしょうか。こうした身体感覚は、その地で生まれ育ち、そして死んでいく人たちのそれとは若干違っているでしょう。地域生活を共有しながらもお互いに異なっているからこそ、色々な人やモノやコトをつなぐことができ、ハイブリッドなモノやコトが生み出されていくのではないのでしょうか。科学の専門性をズラし、研究が変わっていくことが必要であるように思います。住むということは、総合的なことだからです。レジデント型研究とは、地域で研究することに加え、住むということと科学との間に生まれる新しい表現形態ではないかと考えています。研究には多様な表現形態があると思うのです。

◆「半」

こんなことを考えていると、再び、異質な人々が集う萩野宅の魅力が頭をよぎりました。

地域のおばあちゃんもいれば外国人もいる。よそから住みついた人もいればひよこ組もいる。では誰でも出入りできるかと言えば、そうでもない。個人の家でもあるが外に開かれている。公共的な空間のようであって公共的な空間ではない。萩野さんのお家で感じた心地よさは、こうした「半」公共的とも呼べる空間の魅力にあったように思います。

能登フィールド研究会を振り返ってみると、「半」はまるやま組だけのものではないことに気づきました。能登学舎は大学であって大学ではない。人材育成の場であったり、おばあちゃんたちの働き場であったりする。赤石先生でもあるけれど赤石君でもある。一つの空間を一つの機能に限定しない。一人の人を一つの専門や役割に限定しない。能登で沢山見たのは、「でもある」という「半」だったのではないか。

僕自身も大学の研究者でもあるが行政職員でもある。よそ者でもあるが地域住民でもある。当事者でもあるがコーディネーターでもある。こうした「半」によって、いろいろな人やモノやコトが交錯して、新しいモノやコトが生成していく可能性が高まっていく。

僕は一見中途半端な「半」にもう少し身を置きながら、レジデントと研究の間をうごめいてみようと思います。老ひよこが巣立ちできる日は、ちょっと先なのかもしれません。



西野ひかる（にしの ひかる） 福井県小浜市

アマモサポーターズ代表／京都大学地球環境学舎修士課程

学生時代から 7 年間で金沢で過ごした私にとって、能登は遠い存在ではありませんでしたが、数えてみると最後に能登を訪れてから、もう 15 年以上経っていました。何気なく見、聞こえてくる地名や単語、方言が遠い記憶を呼び戻すこともあって、何とも言えない感慨深い 2 日間となりました。

ギリギリまで他の仕事に追われており、何の準備も心づもりもないままに研修に参加しましたが、気になったのは、能登学舎が地域に何をもたらしたのか、というところです。「能登学舎のない私の地元」との比較において、感じたこと、勝手に想像したことを書こうと思います。

古民家レストラン、農家民宿、まるやま組。（到着が遅かったのでへんざいもんはいただいていませんが、たぶんそれも含め）どれも、アットホームでくつろげて美味しくて感動しました。そして、考えました。能登学舎がなくてもこれらは存在したのだろうか？

ある意味 Yes であり、ある意味 No だと思います。それぞれの方々の思いと努力、パワーで、きっと存在はしていたでしょうが、今ほどに輝いてはいなかったのでは、と思います。

では、能登学舎は何をしたのか？

きっと地元の人に自信とやる気、張り合いを与えたのだと思います。世の中の田舎の人はたいてい思っています。「こんな田舎。何にもない田舎。しょうもない田舎」「こんな私。何のとりえもない私。しょうもない私」

そこに、「この田舎が素晴らしいんだよ」と大学がやって来て、研究者たちが「これは学術的に貴重だ」とか「○△◇□（よくわからない

学名）がいるなんて!!」とか「まだ○○○が残っているんですね、すごい!!」と言い始める。「何にもない田舎。何のとりえもない私。」が「何だか少し自慢できるもの」になってくる。そして、知らず知らずに「あれはどう?」「これはどう?」「そう言えば○○さんちには△△があるよ」と、自分達の日常にスポットライトを当て始め、昔からの暮らしの中にある宝物を掘り起こし始める。

それは、自分たち自身を再認識することであり、親や先祖、自分達を取り巻く自然に感謝する気持ちを改めて呼び起こし、また、子供や孫世代にこの大事なものを伝えたい、という気持ちを湧きあがらせ、生きる力になっていっているように思います。

「日常そのものが宝物である」と認識されているのか、みなさん、お客さんに対する取り繕い方をあまりされない、と感じました。一般的に観光で売ろうとすると「おもてなしの心」とかお客様対応の教育をし、表面をきれいに取り繕おうとします。しかし、私は今回、取ってつけたお客様対応を感じず、それがとても心地よかったです。「能登学舎に来た人」ということで、一般の観光客とは違い、普段の地元の人と能登学舎の研究員の皆さんとの距離感で、私たちにも接してくれたのかかもしれません。

農家民宿ではお母さんが「お客さんが来るから、てお父さんがふきのとうを採って来てくれたんだよ。一人っ子だから昔は人づきあいも下手で、もともとはこんなにしゃべらなかつたのにね」と話してくれました。お父さんも「ピザは作れば作るほど赤字になるんだ。モッツァレラチーズが高くて」とニコニコしながら本音ト

ーク。ご飯の準備もみんなでワイワイ手伝って。この無理のない関係、ご夫婦が幸せそうに農家民宿をされている姿が、何よりのもてなしに感じました。

まるやま組あえのこと。「きっと田んぼの神様、八万の神様は、この生態系のことだと思う」と神様のところにトンボや草花の標本が飾られていました。そのときはピンと来ていなかったのですが、後日、新さん（移住された若いお百姓さん）のブログで「田んぼに 30 種以上のトンボがいたことがわかった」と知って、本当にそういうことだと思いました。

能登学舎の人たちは、田舎の人が何となく感じていたこと、大切に代々やってきたことを、科学の目で現代人にもわかる形で見せているのだと思います。能登の人達が守ってきたものが、どんなに大切なものなのかを気付かせてくれるのだと思います。

また、単なる断片的な情報の取得だけでなく、「里山マイスター」や「いきものマイスター」で科学的なものの見方、論理的な思考、体系立てた知識を学び、更に自分でテーマを決めて卒業論文を書き上げる、ということで、受講者の



方々は大きな力をつけていると思います。それがその人の背骨になり筋肉になり、自信になり、へこたれない力に

なっていく。私がこの1年間大学院で学ぶ中で感じたことを、きっと能登のみなさんも感じていると思います。なんとなくぼんやりだった自分のやりたいこと、目指すものが、はっきりわかって堂々と言えるようになる。それは、とても気持ちのいい晴れやかなことです。

最後に萩野さんが言っていたこと。「私は自分が楽しくて、まるやま組をしている。これを〇〇ツーリズムとしてお金に換えようとは思わない。ただ、手伝ってくれる人には、少しお礼ができるようにしたい。」

私たちは今「これ以上ボランティアでは続かないから、収益を上げる NPO を作ろう」「食べていけるようになることが、田舎で自然を活かした生き方ができる、という証明になり、次の世代につながる」と、若狭で新しいツーリズムを創ろうとアイデアを持ち寄っている最中です。だから、萩野さんの言われたことが、少しひっかりました。大事にしたいことを壊さないで生きていくにはどうしたらいいか、自分の宿題にしたいと思います。

「能登はやさしや土までも」本当に目に見えない、言葉で表せないたくさんのものをいただいたように思います。また訪れたい、またお会いしたいと思っています。そして、ひよこ組のみなさん含め、お逢いすることができたすべてのみなさんに、感謝しています。



清水万由子（しみず まゆこ） 長野県上田市
長野大学 研究員

2009年と2011年に、長野大学生と一緒に珠洲の能登学舎と輪島市三井地区を訪れました。学生の「里山里海アクティビティ」実習に同行して、豊かな自然の恵み、深い歴史に支えられた生活文化、人々のやさしさと活力にふれ、能登の深い魅力を感じました。

今回は少し違った視点を持って、能登を訪れました。テーマは「地域に住み込んで研究すること、すなわち「レジデント型研究」です。まず、珠洲で「常駐（定住）する研究者」の皆さんから直接話を聞いて、実践的な地域研究のスタイルを考えるヒントをいただきました。また、三井ではまるやま組の「あえのこと」に参加して、そこに集まった方々とお話をしながら、「学び」ということについて考えました。

能登で感じたたくさんの刺激を、まだうまく表現できませんが、ぎゅっと詰まった2日間を振り返って、考えたことを書いてみたいと思います。

◆常駐する研究者の役割

まず、次々と展開される「おらっちゃんの里山里海」の活動には驚かされました。地元の方の様々な経験と、「頼れる研究者」である赤石さんの科学的な知識がうまく組み合わせられているという印象を受けました。NPOの活動のアイディアが生まれてきたプロセスや、地元の方々のNPOの活動に対する認識が、地域の方々の目線で可視化されると、常駐研究員が地域社会の中ではたしている社会的役割が、より明確になるのではないかと思います。

里山マイスター講座の常駐スタッフの皆さんからのコメントには、示唆に富む話題が多くありました。大学が地域で人材養成にのりだす

と言っても、実際は地元のベテラン農家の方々の支えがあって成り立っているという指摘は、なるほど考えてみれば当然のことだと思います。里山マイスター講座は研究者を養成するのではなく、「地域で生活する」ことのプロを育てるのだから、長い時間をかけてつくられてきた地域の知恵や生業を出発点にしなければ、人々には何も根づかない。机上の論理で終わってしまうのでしょうか。

一方で、科学という「武器」が経験や勘をより洗練させるという指摘にも、納得させられました。確かに自然（生態系）は奥が深く、科学をもってしてもすべてを理解することなどきわめて難しいことです。それでも、科学的な見方は世界をよりクリアに見せてくれる部分があるとも思います。日常的に地域の自然とかかわる産業の担い手一人ひとりが、自然を利用する在来の知恵とともに、科学的な見方という武器を手にする事で、何が変わっていくのか？答えはこれから見えてくるでしょう。これは壮大な実験と言えるのではないのでしょうか。

地域の活性化や人材育成といった時に、常駐する研究者の役割とは何か？このことは、常駐スタッフのみなさんがずっと自問されてきたことだと思います。外からやってきた移住者や研究者が、能登の人々と自然を知って、働いて、生活して、地域の一部になっていく。明確な問題意識や課題を持った人は、いろいろな知識や考え方を吸収していきます。その姿が、地域に刺激を生み出しているのではないかと思います。彼らが学んでいるその相手（＝地元でずっと暮らしてきた方々）もまた、彼らから学んでいるのではないかという気がします。

◆地域で暮らす人々にとっての学び

このことはきっと、2日目のまるやま組に参加した時に感じたこととも関係しています。

世界中から、なぜか今日萩野さん一家のお家に集まって一緒に神様に感謝し、食事をいただいている。なぜ、ここにこんな空間ができているのか？とても不思議な、でもどこかしっくりくる空間でした。日々の悩みや明日をどうやり過ごそうかということはいったん置いて、純粋に“ワクワク”するための空間。

私が自分の家を離れて、遠く輪島までやってきた人間だから、そんなふうに感じるのでしょうか？それだけではないような気がします。萩野さんから、まるやま組という場を成り立たせているものの束が、まるやまの豊かさそのものののだというお話がありました。いつもはバラバラにあって何でもないことが、まるやま組に集まっているいろいろな人の目を通してみると、素晴らしいものだという事に気づける。明日からはまたいつもの毎日だけれど、昨日までとは少し世界が違って見えて、やりたいこと、できることが少し増えたような気がする。次に集まったときに一緒にやりたいことを思いついた。そんなことを、大切にしたいと思いました。

◆レジデント型研究者のこれから

今回、「ひよこ組」で能登を訪れたいと思ったのは、農業、NPO活動などをして地域に暮らしながら地域のための研究や活動をする(＝地域環境学ネットワークでは「レジデント型研究」と呼んでいます。常駐研究者と同じ意味です。)ってどういうことなんだろう？ということ、実際の取り組みを見せてもらいながら、より深く考えたかったからです。

1日目の能登学舎での研究会で、「地域も常駐する研究者も「幸せ」にならないければ意味がない」という言葉がありました。本当にその通りだと思います。ではどうしたら「幸せ」にな

れるのか？そもそも何がお互いの「幸せ」なのか？「幸せ」なレジデント型研究者の姿は、ひよこ組のメンバーがこれから模索していく課題です。



今回は、地域の方の声を聴かせていただく時間を十分にとることができませんでした。それは次の課題としておいて、研究者側の視点から考えてみたいと思います。それが、今の私の立ち位置でもあるからです。

今回、ひよこ組のメンバーがそれぞれに多様な常駐研究(レジデント型研究)や訪問型研究(よその地域から訪問して地域のための研究を行う)のスタイルをつくろうとされていることに、とても勇気づけられました。自分がこれからはすべきことを、前向きに考えられそうな気がしています。

福島県天栄村湯本の星さんは、婿入りしたことで、自分の入る墓、つまり自分の最終的な行先ができたと話していました。根無し草のように漂っている自分にはうらやましく感じられるのと同時に、星さんのスタイルはレジデント型研究者の1つのあり方だなと感じました。自分がやりたい研究を自由な時間にやる(大学に雇われるとかえって無駄な仕事に時間をとられる)という考え方は、地域に根差した生活が基本にあるからこそできるものだと思います。きっと、星さんの生活の中に、米作りや消防団活動と一緒に研究も織り込まれていき、それは湯本という集落の中にも織り込まれていくのでしょう。いろいろと面倒なこともあるけれど、それも含めて星さんは湯本に住むということを選んだのだと思います。

赤石さんから、これからの活動への展望を聞いたことも、レジデント型研究の新しい可能性の広がりを確認できたように思います。これまでの能登での活動の蓄積を無駄にしないため

にも、大学と地域の自治体や地域組織との橋渡し役をして、地域にとって役に立ちそうな事業や計画を提案していく立場を、自らつくっていくのだという気概を感じました。

これまで象牙の塔に引きこもってきた大学や研究者が地域に出ていくには、それなりの覚悟が必要なのだと思います。地域に入り込むといっても、実際にやろうとすると経済的に難しかったり、既存の組織に絡め取られたり、そういう生き方を想像することすら難しかったりする。地域の小さな博物館や地方大学の研究所などでは、すでにレジデント型研究者が活躍していますが、もっと多様なチャレンジがあつてよいと感じました。

そうしたチャレンジは、大学院を修了してから3年や5年という短い期間でも、はじめからその意思を持って取り組めば、できないことではないのかもしれないと、対馬の木村さん（対馬市で3年間市職員として雇用されている間に対馬での地域活性化活動の基礎をつくりた

いと語っていました）や赤石さんの話を聞いて感じました。

地域社会と研究の世界は断絶しているのではなく、行ったり来たりできることが、地域での多様な「学び」には必要だと思います。レジデント型研究者は、その間に立っていろいろな知識や考え方をを持った人たちをつなぐ役割を持っているのではないかと思います。それは大学人である必要はありません。むしろ、地域の中で多様なレジデント型研究者を発掘し、育てることが重要なのでしょう。能登学舎の取り組みは、まさにそういうものだと思います。

様々な能登で出会った皆さんと、その後ろにいるであろう多くの人々の姿を想像しながら、レジデント型研究というチャレンジが、ますますおもしろくなってきました。自分自身が、どこでどんな形でチャレンジに加わることができるのか、じつはまだ明確になっていません。ひよこ組のメンバーと議論しながら、考えていきたいと思っています。



寺林暁良（てらばやし あきら）東京都

農林中金総合研究所 研究員／北海道大学大学院文学研究科博士後期課程

雪山を歩きました。アカマツの林間から差し込む陽の光は、サカキの緑の濃さをさらに際立たせていました。簡易郵便局の裏手から日本海に臨みました。遠浅の海は真っ透明で、その中でアオサが穏やかに揺れていました。ほだ木の隊列に、田の神に祈る儀式。そして、「いしる」のかぐわしさ。

能登は限りなく魅力的でした。その魅力を、科学者として、外部者としての視点で可視化する能登学舎やまるやま組の皆様は、率直に素晴らしい活動をなさっていると感じました。「へんざいもの」や「典座」さん、「ひろ吉」さんでいただいたおいしい郷土料理、「まるやま組」さんが取り組む「あえのこと」、そして能登学舎さんが調査されている生物多様性。どれも能登のかけがえのない魅力であり、人のにぎわいを生み出す資源となっていることを実感しました。「能登里山マイスター」を卒業された皆様のご活躍にも、無限の可能性を感じます。

しかし、たった2日という短い期間で触れることができたのは、ごく一部分の、しかも象徴化された能登であり、むしろ分からないことばかりをずいぶんと背負い込んで帰ってきたように思います。社会学を学び、いつも「地域の方々」を対象に調査をさせていただいてきた私には、「能登の皆さんのこうした活動に地域の方々がどうかかわっているのか?」、「生活の“リアリティ”や地域の“切実”な課題にどこまで入り込んでいるのか?」、それがとりわけ気になっていました。

私は、長く青森県の岩木川という川にあるヨシ原の保全にかかわってきました。このヨシ原

では、希少種の鳥類や植物が豊かな生態系として、研究者の方々が保全を訴えています。その一方、茅葺き屋根やヨシズ、受粉用昆虫の巣材などに利用されており、地域の方々がヨシを刈り取り、火入れを行って管理しています。

私は地域の方々に、「ヨシ原をどのように利用してきたのか」、「なぜヨシの需要があまりなくなった今もヨシ原を保全する必要があると考えるのか」というお話を伺ってきました。すると必ず、話題がいつの間にか「堤防管理」のことになっています。誰にお話を伺ってもそうなのです。「なぜヨシ原の話をしていると、必ず堤防管理の話になるのだろうか?」初めは意味がわかりませんでした。

しかし、何年か通い続けると、地域の人々の認識のなかで「ヨシ原」と「堤防」がどうつながっているのかがわかってきました。洪水を多く経験してきたこの地域の人々にとって、堤防管理はまさに生活の切実な問題です。洪水の度に土嚢を積んで集落を守り、補修を繰り返してきました。今でも年に2度の堤防除草は、地域の一大行事になっています。堤防管理は基本的に集落ごとに行いますが、いくつかの集落で「堤防保護組合」を組織し、大事なことはここで話し合ってきました。

実は堤防もヨシ原も国土交通省所管の国有地です。しかし、地域の方々の生活に密着しているからこそ、地域の方が自治管理してきたし、当然かかわり続ける権利があるのだと主張してきました。ヨシ原も同じで、自分たちがずっと管理してきたからこそ、利用する権利も管理する義務もあるのだ、と。そして、ヨシ原管理も堤防管理も、土地管理という面で連続してい

るのです。

こうしたヨシ原と堤防とのつながりは、地域の人にはわからない感覚です。土地の「所有」や「利用」の概念も、我々の常識からは少し外れています。しかし、これが地域の方々がヨシ原保全を行う「ストーリー」であり、管理主体として認識なのです。そして、こうしてずっと管理してきたヨシ原に対して、研究者や自然保護団体が外部から「自然」として関わってくることに、地域の人々が大きな違和感を感じていることも分かりました。

このヨシ原で社会調査をして良かったことは、こうした地域の方々のストーリーを研究者らが理解する上での手助けになったことです。実際、これが明らかになったことで、生態学の研究者や国土交通省のかかわり方もずいぶん変わりました。「生物多様性はなんたらかんたらだから重要で…」といった生態学的なストーリーも、岩木川では「そういう価値観もあるよね」と、かなり相対化して捉えられています。そして今では、地域の方々・科学者・行政などがお互いの価値観・ストーリーの違いを認め合うことで、一緒に新たな「ヨシ原保全のストーリー」を紡ぎ出そうとしています。

あくまで想像ですが、能登でも同じようなことが起こっているのではないのでしょうか。里山であれば、いつの時代にどのような人びとが、どんな用途で利用してきたのか。利用したのは、個人か、集落か、組合か。利用のルールについては、クリはどうでキノコはこう、ナラはこうと収穫物によって違うこともあるでしょう。ため池についても、管理するのは田んぼの所有者か、集落か、実行組合や土地改良区とのかかわりはどうか。ルールはどうなのか…。このよう

に、皆さんが活動されているフィールドでは、歴史や慣習、組織やルール、問題といった「社会的なもの」が網の目のように張り巡っていることでしょう。そして、それらを踏まえなければ、皆さんの里山やため池での調査・活動と矛盾が出てきてしまうでしょうし、地域社会との関係もどこか“ちぐはぐ”なものになってしまうと思います。

こうした中で、能登をフィールドにしている皆さんは、意識するしないにかかわらず、様々な社会関係のなかで地域のストーリーやリアリティに触れ、地域とのかかわり方を変えてきたのではないのでしょうか。そして地域の人々が、新たに能登にやってきた皆さんのストーリーを受け入れきた部分もあるのでしょうか。私は、地域環境保全に関わる活動では、こうした相互変容こそが重要だと思っています。なぜなら、それは相互理解に基づく歩み寄りであり、新たな協働につながるものだと思うからです。そして、このあたりは、社会調査をしてみないことには見えない部分だと感じています。



能登で頑張る皆さん方と、能登でずっと生活してきた地域の人々。それぞれの「能登のストーリー」はどのくらい共有されたものなのかなあ。それを社会調査でぜひとも見えるものにしてみたいなあ。そんなことを考えていました。



浪崎直子（なみざき なおこ）茨城県つくば市
国立環境研究所

今回、初めて能登を訪れました。地域環境学ネットワークの研究会も初めての参加でしたので、議論についていけるかどうかという不安と、どのような出会いがあるのかという期待が入り混じった気持で参加しました。私は普段、文部科学省の科学研究費の研究プロジェクト「サンゴ礁学」の事務局として、内部の異分野連携と地域連携を仕事にしています。「サンゴ礁学」は、沖縄県の石垣島や瀬底島などを拠点に訪問型の研究を進めており、私はこれまで訪問型研究プロジェクトとしての地域連携を実践してきました。研究成果を伝える講演会やポスター展、学生の教育プログラムを通じた地域との交流、地域のニーズのフィードバックなどを実践し、研究者からの一方的な成果発信だけではない地域連携を模索しているところでした。今回、他の地域連携の事例を知り、能登の事例から学びたいと思い、研究会に参加しました。

◆金沢大の里山里海プロジェクト

金沢大の里山里海プロジェクトで、一番驚いたことは、生態学者を中心に人類学者などのさまざまな分野の研究者複数名が、地域に住みこみ、社会人向けの人材育成や参加型の生きもの調査などの実践を通じて、深く地域に入り込んでいるところでした。キノコや植物、水生昆虫など、それぞれの生態学の専門知識を活かして、市民生物モニタリングや資源管理に関わっておられること。それだけでなく伝統料理などの地域資源の掘り起こしやエコツアーの開発を行うなど、生態学者と地域コーディネーターの二足のわらじをはいて活動している研究者が複数名、同じ地域で活動されているというのが

とても新鮮でした。

さらに人類学者の中山さんから、一方的な生態学の専門知の伝達だけではない、伝統知と科学知を融合した新しい知の創出に視点を置いてすすめているという話もありました。今後異分野の研究者が、それぞれの視点で地域に関わることで、どんなものが生まれるのだろうととても興味があります。金沢大学の取り組みはしっかりと地域に根を下ろしていて、ここまで地域に入り込んでいるところがあることに驚きました。

◆能登里山いきものマイスター養成講座紹介

能登里山いきものマイスター養成講座は、2年間のコースで、卒論があるというNPOとは異なる大学らしい実践と感じました。なかなかハードルが高く、でもだからこそ関心のある人たちが集まっているのだと思います。また、宿泊した農家民宿のお父さんは、生き物に関心がなかったが、能登里山いきものマイスター養成講座生き物で生物調査を学び、調査を楽しそうに語るようになったとおっしゃっていました。生態学の科学知を伝達することで、価値化するというのはこういうことなのかと感じました。今後修了生のネットワークを活用した展開を考えているとのことでした。

◆まるやま組の取り組み

能登里山いきものマイスター養成講座の修了生であるまるやま組の萩野さんは、「まるやま組ってなんだろうということをわかりたくて、能登里山いきものマイスター養成講座を受けた」とおっしゃっていました。卒論のプレゼンをお聞きして、いままでやってきた実践を表

や図、文章に落とし込み、試行錯誤しておられることが伝わりました。特に、根を使って表現した図は、圧巻。それでも、最後には「学んでみたけど、やっぱりまだよくわからない。でもわくわくしてる」とおっしゃっていたのが印象的で、科学の論理的な思考や言葉ではまだ伝えきれないものがあるという感じがしました。

◆全体を通じて

この金沢大の取り組みが地域にどのようなインパクトを与えたかが見えると面白いなと感じました。こうした活動の社会変容の評価を模索している環境社会学者の菊地さんから、評価軸として、知の創出、ネットワークやステークホルダーに



変化があったかなどを検討しているという話を個人的に聞き、また私はこれから、私の対象地域で環境教育と社会心理学の評価軸をつかって「個人の変容」に焦点を当てたアンケートを作成しています。今後「社会変容の評価」についても議論が進むと、地域研究としても非常に面白いものになると感じました。

これまで、レジデント型の研究者の役割、まずはその研究者の専門を超えて地域に役立つ知を収集、提供すること、と思っていましたが、今回参加して、生態学者と社会学者で違って、生態学者ができることは専門知を伝えて価値化すること、保全行動の効果を測定し評価すること、社会学者にはそうした行動がどのように社会にインパクトを与えたか評価すること、これらがうまく連携できるとよいのではないかと思います。



星（富田） 昇（ほし とみた しょう） 福島県天栄村

東北大学大学院環境科学研究科新妻研究室

3年前、以前の勤め先でのゴタゴタが嫌になって失業者となっていたわたしは、半ば自暴自棄な気持ちで福島の山村への移住を決意した。しかし、農村社会の構造や、そこに暮らす人々の考え方などまったく知らない状況で飛び込んでいったので、はじめはただひたすら人間関係作りと、豊富に存在する山林資源の活用について試行錯誤を繰り返した。そしていま、月日が流れ、いくつか形として見えてきたものがあるものの、それが本当に地域のなりわい起こしと自然再生につなげることができるのかどうか、もうひとつ自信のない状態だった。

そしてこのたび、能登フィールド研究会に参加させていただいた。以前からいろいろなところで先進事例を拝見したいと思いつつ、出不精のためなかなか機会がなかったところを、こうしてお誘いいただけたことにまず感謝申し上げます。

2月下旬の能登では、雪が残るものの、少しだけ春の気配を感じることができた。

プレゼンテーションによって金沢大学能登学舎での活動と、里山マイスター養成プログラムの概要をご紹介いただいた。これらの取り組みが、実際に地域の環境や社会にどのように波及しているのか。実際にフィールドをご案内していただき、地域の人と接することで感じたことを、ここに綴ってみたい。

みごとに再生したアカマツ林は、マツタケ山を目指しているという。わたしも東京近郊にいたときには、多くの「管理された里山」を見てきたが、それはもはや



単なる愛玩の対象になった山で、緑が茂っていればよいという、地域の暮らしとはなんの接点もないものばかりだった。しかしこのアカマツ林は違う。マツタケという商品を生産する場所であり、林の管理はすなわち収入を得る行為と結びついていた。

道端の小さなため池には、サンショウウオの卵塊が見られた。能登では生物相の調査がさかんにおこなわれ、その把握が進んでいる。生物多様性は、ここ数年で急速にその重要性が認知されてきている。しかし地域の人たちは、いてもいなくても生活に関係のない生物に対しては関心が低いことが多い。わたしのフィールドの湯本でも、無農薬田んぼでの絶滅危惧種の発生に興奮して騒いでいたわたしは、「農作業をせずに遊んでいる骨病み（怠け者）」であるといわれた。しかし、こうした希少生物は地域の魅力を高めることはあっても損なうことはなく、農作物のブランディングに利用できる可能性もある。このときフィールド見学に同行していただいた地元の方も、「調査をとおしているいろんな生き物がいることを知ることができた」とおっしゃっていた。ここでは、有益か有害かに偏重しがちな地域の人々の生物相への認識が、生物多様性調査をとおして変わりつつあることを感じることもできた。

今回、地域資源としての「食文化」の重要性も感じることもできた。昼食をいただいた「へんざいもん」。福島県天栄村湯本でやりたいと思っていた土日だけ営業の農家レストラン。その見本がある、と思った。「典座」でも「ひろ吉」でも、能登の味覚がふんだんに出てきた。ご主人は「ふだんうちで食べているようなものばかりで申しわけない」という。しかしわたし

たちは「これ以上のごちそうはないのに」と思う。この意識の差は、湯本も同じだ。「わりいない、山菜とキノコしかねくてよお」。何度聞いたことばだろう。それがここでは、なりわいに結びついていた。

翌日は「まるやま組」にて「アエノコト」を見学させていただいた。農業や自然環境と信仰という、地域の価値観の根底にあるものが、若い世代に継承されていた。まるやま組では「自分たちの取り組みを、うまく説明することができない」というようなことをおっしゃっていたが、昔から地域に住んでいる人に「なぜここに住んでいるのか」とか、「なぜこの行事を続けているのか」と聞いても、はっきりした答えなど返ってこないのとおなじで、ごく自然なことであると思った。

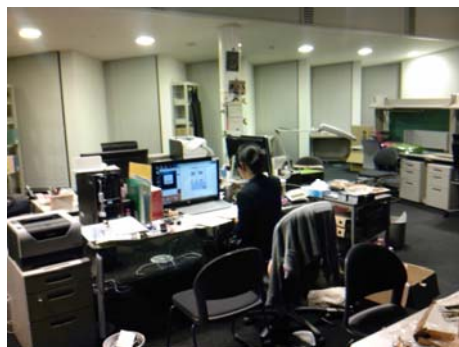
このように、能登では金沢大学を中心とした取り組みが地域に浸透しつつあり、地域の人々が地域の魅力に気づき、それを活用する手立てを模索していることがよくわかった。湯本でも参考にできる点が数多くあり、非常に有意義な時間をすごすことができたと思う。

一点、質問し忘れたことがある。それは、これらの活動にどれほどの地元の若者が関わっているかだ。こうした活動に積極的に関わってくれるのは、経済的にも時間的にも比較的余裕のある60歳以上の人たちが多いと思う。しかし、そういった人たちも10年後には担い手として活動するには難しい年代となるはずで、そのままの形態での活動は、持続可能とはいえない。また、Iターンなど外部の人間はなかなか地域の「主役」になれるものではない。やはり地元出身の若者の奮起を望みたいところである。そのためにも、地域資源をうまく活用したなりわいを、持続可能な形で創出し、若者が住みたいと思う地域、帰って来たいと思う地域にしていくことが重要であると、自分自身にも言い聞かせ、帰路についた。

能登フィールド研究会 振り返り Skype 会議

能登でのフィールド研究会を終えた後の4月14日、インターネット電話サービス「^{スカイプ}Skype」による振り返り会議を実施しました。

金沢大学能登学舎（珠洲市）には赤石大輔さん、総合地球環境研究所（京都市）には清水万由子と寺林暁良が集まり、能登フィールド研究会の感想や現地でうかがいきれなかった疑問について語り合いました。



清水：まずは、私たちが能登学舎にうかがったときの正直なところの感想をお願いします。

赤石：はい。短期間の視察の受け入れをしてきた経験はあるので、準備はそんなに大変ではありませんでした。幸い色々なところも見せられたし、われわれの活動がある程度知っていただけたと思っています。ただ、これからの活動をどうして行くのがいいのか、こうした活動の立ち位置など、我々が悩んでいることについての議論をもう少しできたらよかったです。

清水：ちょうど活動の立ち位置を考えているタイミングなのかなあ、というのは私も感じたところでした。参加者からは、能登学舎と地元の人とかかわり方を知りたいという声がありました。地元の人たちは能登学舎の人たちをどういうふうに見ているのでしょうか。

赤石：いくつか段階があると思います。里山マイスターを受講している方と、地域にいるけどあまり接点がない方がいるので、それぞれかなり印象は違うと思います。三崎町の一般の方の中には、「大学がやっていることで、自分たちにはあまり関係ないでしょ」と思っている方も結構いると思います。

清水：里山マイスターは、地域のリーダーになる

ような人材を育てる活動だと思うので、色々な受け止め方があると思います。ただし、講座を受けて色々刺激されている人、ネットワークを作ってアクティブに活動されている方がいることは素晴らしいことだと思います。

赤石：もうひとつは、どこまでが大学の仕事なのか、ということは、ずっと議論しています。地域づくりは研究者じゃなくてもできる。僕らは現状、何でもやっちゃっているの、それでよいのかと思っていますし、それでよいわけではないとも思っています。

寺林：赤石さんたちとしては、生態学者として関わる、という関わり方なのでしょう。

赤石：ひとつはそうですね。スタッフでは、個体群生態学の専門家で、能登の水田での環境保全型農業を目指すために、害虫の防除について地域と一緒にやっています。それは農家さんにとっても直接メリットのあることです。非農地にビオトープを作るのが希少種保全では一般的だけど、それは農家にとってはとても負担になっているので、農地の維持で保全の効果があることを、一緒に検証しています。キノコのこともしですね。ですから、生態学の手法を用いて貢献できていないこともないです。ただし、その仕事メインではなく

なっている部分もあります。マイスター制度自体、人材育成が目的です。受講者 60 数名から、生態学とは全く関係のない好み・要望もある中で講師をしているわけです。ただ、一步引いた目線で客観的に自分の活動・なりわいを評価して、課題を掘り下げるという論文指導は、ひとつは大学らしい仕事なのかな、と思っていますね。

清水：論文を書くとか研究するというのは、改めて地域を見直すという作業になりますね。

赤石：ええ。その作業は、他のしくみではなかなかできないと思います。コンサルが来てやって、結果だけ見せてくれるとことのはあるのですが、地域の人と一緒にその作業をした、というのはあまりないですね。そのプロセスを一緒にやったということですね。

清水：地域の人が「学ぶ」ということの意味は、能登学舎の人たちにとって大事で、評価すべきところですね。

赤石：そこは当事者が一番過小評価しているというのはあって、僕は一番近い第三者として、ちょっと引いた目で評価をしたいと思っていますし、絶対それは続けるべきだと思っています。当事者としては粗ばかり気になってしまうのでしょうか。

清水：もちろん地域の人も論文を書いたり実習を受けたりする中で、学んでいると思うのですよ。でも、地域の人から研究者の側も学ぶことが多いわけですね。その辺はどういうふうに認識されているのでしょうか。

赤石：そうですね。結構難しいですね。さっき話したとおり、スタッフの中で客観性が失われている部分がやっぱりひとつの問題です。

清水：一緒に学んで一緒に課題に取り組んでいたら、研究者であってもやはり当事者になって

しまいますよね。それは無理に引き離さなくてもいいのではないのでしょうか。でも、それではいかん、という考え方でしょうか。

赤石：じゃないか、という話です。それはまさに「地域仕事人」みたいな人がやる仕事なのではないかと。

清水：科学者の目と「地域仕事人」的な目は同居できない、と。

赤石：両方あったらいいと思いますね。我々はいま研究者として関わっているので、常に客観的にあるというのは難しいです。

寺林：そういう話はどこでもあると思いますね。社会学でも、ちょっと離れて運動なんかを見るというモノの見方をする一方で、自分たちも当事者として関わりながらやる研究も非常に増えてきて、そのどっちがいいのか、という話がありますね。しかし、多かれ少なかれ、研究者のバイアスがかからないような研究なんかないという立場もありますし、それも含めて研究なんじゃないかと思います。

清水：社会科学の方との共同研究はありますか。

赤石：今、京都大学にいる北野慎一さんは、マイスターのスタッフでした。彼自身も一時期はレジデント型研究者でいたわけだから、フィールドも良く分かっています。地域の方も北野さんが来ると大歓迎で、キーマンでした。やっぱり彼も一步引いたというか、自分のスタンスは持っていたいというので、入りすぎないように気を使っていたみたいですね。なぜかというと、地域の課題などをちゃんと指摘できなくなってしまうのは怖い、といっていましたよね。過疎地域の撤退論をやっている方が、石川県とか、金沢大学のスタッフと話をすると、「撤退とか言うな」みたいに、結構感情的に批判をしてしまったりすること

があるわけですね。金沢大学の先生には受け入れられないところもある一方で、地元の人に話をすると、「まあ、それもそうなのかなあ」みたいな反応だったり。やっぱり外の人だからそうやって言えるのだろうし。

寺林：逆に、能登の人たちがどういう問題意識を持っているのかを明らかにするというのも科学者の関わり方としてあると思うのですけれども。

赤石：そうですね、僕らもまさに当事者なのだけれども、世界農業遺産というものが去年 1 年間で指定されて、「能登や珠洲市の世界農業遺産というものは何なのか」を市民レベルで議論しているという取組みが結構あるのですよね。議論やワークショップをしていく中で、どのように地元の人が「珠洲らしさ」などを見つけていくのか、というプロセスは研究のひとつになるのかな、という気はしています。

清水：そういうプロセスがないと、本当のところはわからないというか、それがあからストンと落ちるということもあるだろうし。そうあるべきではないかという気がします。

寺林：僕が気になったのは、生物多様性ということで調査している研究員の方々に、能登という環境がどういう社会システムの下で成り立っているのかということ、調査されている方はいるのか、ということです。例えば、ため池であれば必ず管理者の方がいて、そのため池が適切に管理できなくなったことがゲンゴロウに影響することがあると思います。そうすると、ゲンゴロウの保全では、ため池管理の社会システムの有り様を考えていく必要が出てくると。山もそうで、山の所有・利用・管理のあり方が生態系のあり方に関わってきます。その当事者との情報のやり取りがあるのか、というのは非常に気になったところで

す。

赤石：そうですね、残念ながら専門としてやっている人がいなかったもので、研究レベルにはなっていないです。ただ、地域の人とコミュニケーションはしていて、情報はそれぞれ把握していますよね。だからそういう情報を研究にできる人がいたらいいなあとは思っていますね。

寺林：そういうところを明らかにするのは、ひとつ社会科学ができる仕事だと思います。そして、地域の課題に密着していくと、どんどんと文系と理系とか、生態学と社会学とか、研究者と地域住民とか、境目がなくなっていくのではないかなと思うのですよね。役割分担も大事ですけども。地域環境学ネットワークとしては、そういうところも非常に大事な研究の分野だと思っているので、生態学だからここまでしかできないとか、そういう議論だけではなく、新しい「あいだ」のところの研究のあり方みたいなものと一緒に議論できたら面白いと思いました。

赤石：そうですね。ちょうど今、5 年間やってきた節目で、スタッフの間でも、地域でアンケートというか振り返りをして、どのような変化があったかというのがまとめられたらいいなあ、という話は出ています。まあ、地域がどう変わったか、というのは知りたいのだけれども、それをどう調査するのかは僕も良く分からないのだけれども。

清水：私も、地域の方にインタビューをして「この活動をどう思いますか」ということを聞くことがあります。でも、やっぱりそれなりに聞く側と聞かれる側の関係がないと、わからないのではないかなと思ってしまう。当事者との関係性と第三者目線の両方持った人の観察と、マイスターのスタッフの皆さんの目で見

た受講生の変化、本人の自己評価、それらを合わせてやるのが良いのではないかという気がしますね。

寺林：そういう意味で言うと、第三者的な位置にいらっしゃる赤石さんには、非常に重要な役割があるのではないかというふうに思います。

清水：こうした変化の「本当の姿」みたいなものはないと思うのですよね。結局はこの人から見たこの人の変化というものしかわからないので、それはそれでいいのではないかと思います。

寺林：もう一つ、個々人の変化だけではなくて、社会としての変化も気になっています。農山漁村地域に入っていくと、個人と話をするとよりも、自治会長さんに話を通す、というように、地域組織との関係で物事を進めることも多いですね。

清水：マイスターだと、個人が単位じゃないですか。そうすると、次のステップなのかもしれないですけど、集落やムラとしての変化みたいなものは、どうでしょう。

赤石：うん、なかなか難しいです。一方で、社会の変化とっていいのかは分からないけど、行政がそういう取組みにお金を出してくれるようになってきていますよね。大学も。これまで文科省の振興助成金でやってきたものを、県と大学と市町村で出し合ってやっていくというのは、僕から言わせればずいぶん大きな変化だなあと 생각합니다。

寺林：それは本当にそうだと思います。やっぱり公共性を帯びてくるというか、いろんな人が関わって大事だということになってくると行政も協力してくれるようになるし、そうなれば予算もつくようになってきますよね。ところで、マイスターの卒業生の人たち同士で、ネットワークなんかはできているのですか。

赤石：そうですね。受講期間が2年と長いので、皆さん友達になっていますよね。同窓会もできています。ただ、同窓会で何かやろうというところまで動かないと、徐々に関係が切れてしまうという危険もあるかなあと 思いますね。今のところは終わったばかりでみんな仲がいいので、つながりはありますよ。僕としては、彼らが大学生と一緒に何かをやっていくような、教育支援者のような形でマイスター卒業生が講義に出てほしいし、マイスター卒業生の職場にインターンで大学生が行くというのができればよいと思います。

清水：話は尽きないですね。スカイプ会議もなかなかいいですね。

(了)

「ひよこ組」フィールド研究会を受け入れて ―能登からのコメント―



赤石大輔

NPO 法人能登半島おらっちの里山里海・研究員（当時）

珠洲市企画財政課自然共生係・自然共生研究員（現在）

平成 24 年 2 月 25、26 日に実施された地域環境学ネットワークひよこ組による能登フィールド研究会では、全国各地から地域環境の研究に携わる若手が能登に集まり、金沢大学をはじめ能登で行われている様々な活動を見学し、またお互いの活動を紹介して交流した。私は研究会の受け入れ側の立場から、今回の研究会で得たもの、また能登で活動する若手研究者として、自分なりに見えてきたことなどを述べたい。

1. 受け入れの準備

前年の 12 月に清水さんから研究会の打診を受けたときは、どのような方が参加されるか判らなかったが、すぐにあれと、あれと、あれを紹介しよう、あそこでご飯にしよう、あそこに泊まってもらおう、といった感じで段取りを決めることができた。これまで視察や研修を何度か受け入れてきたことで、時間配分や予算についても把握ができていたし、地元の方々も協力してくれる体制ができていたからだ。地域連携を掲げる研究機関、その現地スタッフの面目躍如といったところか。私の肩書きは一応、研究員であるが、この五年間の能登での仕事の大部分は、こういったコーディネーター的作業が大半であった。ここですこしコーディネーターについて話したい。大学と行政や地域住民の連携を進める上でコーディネーターという立場は大変重要で、コーディネーター養成が地域再生の鍵であるという議論もすでにされ尽くされている。では地域に入って活動をするレジデント型研究者は、自らがコーディネーターであるべきなのか。この問いについて自分は、レジデント型研究者は自らの研究はもちろん、研究

機関と地域、訪問型研究者と地域を繋ぐコーディネーターであるべきだと考える。また仮に専業のコーディネーターがいた場合も、レジデント型研究者のサポートのみならず、自身が何らかのテーマを持って地域と関わる事が必要と考える。しかし実際やってみるとそのバランスをとることが大変難しく、自分は研究が十分にできていないコーディネーター業ばかりやっているレジデント型研究者だ。限られた予算や時間の中で、より分かりやすい成果のための作業を優先すると、自分の専門分野の研究は後回しになっていった。今後は自分の研究をする時間をより確保したいと考えているが、はたしてどうなるか。このあたりの議論はレジデント型研究者の皆さんとまたじっくりしてみたい。

2. 客観的評価の手法とは

さて、研究会の流れは大体準備できた。しかし、今回は単なる視察、見学旅行ではなく、若手のレジデント型研究者の集まりで、地域環境について議論する場である。自らの活動を客観的に評価し、参加者に伝え、深い議論と新しい発見を提供することができるか。当時、能登

学舎は里山マイスター4期生修了課題発表の直前で、マイスターのスタッフに、議論する時間をとってもらうことはできなかった。プロジェクトも最終年度の年度末だったので、自分たちの活動を振り返るタイミングとしてもちょっと間が悪かった。私の中では適当な答えが見つからないまま、研究会当日を迎えてしまった。

活動の評価については、受け入れを終え、後日清水さん、寺林さんと Skype で振り返りをしたときに、お二人からは「活動自体が大変面白い研究テーマだ」、という風におっしゃっていただいたが、自分を含めスタッフの多くは自然科学分野の研究者なので、社会学的な分析の方法を知らないため、自分たちの活動自体を研究テーマと据えて見たことがない。それはたしかにもったいないことだと思うし、こんな活動をしました的な感想文ではなく、自身の活動と他の活動を比較し、分類したり、相対化したりして(社会学的なアプローチってこういう感じ?)、ぜひ学術的にまとめていけたらと思う。

3. 過大評価と過小評価

上で述べた通り、自分たちの活動を十分評価できていない状態だったので、能登学舎の課題などを十分お伝えできなかったと思う。今回初めて能登地域へ、また能登学舎へお越しの方ばかりだし、こちらからは分かりやすい活動を紹介したので、皆さんから大変良い評価をいただいた。しかし、例えば食堂へんざいもんは、地域のお母さん方が楽しくやってくれているのだが、実はかなり無理をして、色々を持ち出

しでやっていて、ほとんど利益は出ていないし、かといってさらに利用者を増やすための情報発信などは彼女達にはなかなか難しいなど、課題も一杯だ。当事者からはどうしても自分たちの活動の粗ばかり見えてしまい、活動を過小評価してしまうパターンに陥ってしまう。繰り返しになるが、客観的な評価が必要だと感じている。

4. 地域課題研究拠点とフィールド研究会の今後

今回の研究会は、能登学舎の主な活動内容と、参加者の皆さんのそれぞれの活動を聞くことができ、とても有意義だった。参加者の皆さんから色々なコメントをいただき、能登学舎が今後どうあるべきなのかを考えることができた。能登学舎は平成24年度から新たなスタートを切り、大学や地域からの要望もさらに増えてきている。地域に入り活動する我々は、どこまで研究者としていられるのか、どうすれば新しいものを創り出せるのか、議論の最中である。

今回のような研究会は、ひよこ組でぜひ今後も続けていただきたい。レジデント型研究者同士が情報交換し、お互い評価しあったり、課題について議論できる場を持ちたい。それはオンライン、オフラインを併用しながら、わいわいとやれたらと思う。次回の研究会はどうか。楽しいフィールドに皆さんと伺いたいです。

(平成24年6月02日)

小路晋作

金沢大学地域連携推進センター 博士研究員

地域環境学ネットワーク「ひよこ組」の皆様、2月は能登学舎までお越し頂き、また、レポートをお送り頂きありがとうございます。これまで、たくさんの視察をお受けしましたが、こんなに力が入ったフィードバックを下さった方々はいなかったので感激しています。短い時間ではありましたが学舎での研究会を思い返しながら、私が従事していた『「能登里山マイスター」養成プログラム』のその後について述べます。



「里山マイスター」は、昨年度末に5年間の事業が終了しました。文科省からの資金はいったん切れましたが、金沢大学と自治体（石川県と奥能登の4市町）が資金を拠出し、当面3年間の予定で、大学が主体となって後継事業を実施することが決まっています。能登学舎の存続が不安定である状況は変わりませんが、こうした動きは、能登に大学のサテライト拠点を継続して置きたいという地域自治体や金沢大学の意思を表しています。能登学舎では2人の職員が学舎を離れ、現在3名が金沢大学の非常勤職員（博士研究員と教務補佐員）として、後継事業（10月開講予定）の構想作り等に携わっています。

研究会のテーマであった「地域で暮らす人々が求める『学び』とは？」については、まさにこの数ヶ月、後継事業の内容を検討しながら私たちが議論を続けている点です。後継事業では、金沢大学と自治体に対して、より直接的な形で成果をアピールしていく必要がありますが、経済活性化に直接につながる事業を期待する自治体と、教育研究の成果を求める大学との間に大きなギャップがあるようです。能登学舎に常駐する我々の立場としては、「里山マイスター」修了生に相手になってもらって、これからの能登学舎のあり方について意見交換を

重ねてきました。このなかで私が修了生の意見として共通していると感じたのは、受講を通じて幅広い志向や属性の知り合いができた点、幅広い知識を得て視野が広がった点が評価されていることでした。今後も特定の分野（ビジネスとか、ツーリズムとか）に特化するのではなく、様々な立場の人が様々な角度から学べる場所であることが重要であるように思います。一方、反省点としては、個人の成長につながるプログラムとしては良いが、地域へ成果が反映されにくかった点が挙げられそうです。つまり個人レベルの取り組みが卒論という形で終わってしまい、必ずしも地域の中で根付いていかないという反省です。後継事業では、対象を個人からグループへ、点から面へとスケールアップさせて、地域レベルの活動へ発展させることをサポートできないかなと考えています。たとえば「まるやま組」をひとつの核として、当事者や関心をもつ人が集まって様々な角度から学び、合同で卒論をひとつ仕上げるようなイメージです。テーマによっては大学の研究者も参画して、学術成果をあげられるような仕組みも作りたいと考えています。

「レジデント型研究者の役割」については、自分自身、まだ「レジデント」としても「研究者」としても中途半端なので、なんとも面はゆ

かったです。私のような基礎科学(昆虫生態学)の研究者には、「研究のおもしろ話を分かり易く伝える」ことが目指すことのひとつだと思いますので、今後も能登での研究を深め、「おもしろく」することが第一かと思っています。先日、地元の住民を対象として水田の生物調査報告会を行いました。こういった機会に本気で取り組むというのが重要だと思います。

当日は、「里山マイスター」の卒論前後で、何だったか、とても忙しく、ゆっくりお話でき

なかったのが残念でした。レポートを拝読して、各地で興味深い活動に携わっておられる方々が来られていたことを知り、残念の意を強くしました。また何かの機会の皆様とお会いし、お話しできる機会があれば幸いです。

(平成 24 年 6 月 22 日)

ひよこ組の皆さんへ

去年の2月一面の雪の中、アエノコトにひよこ組のみなさんがやって来て下さったまるやまは、自然栽培の新井さんの田植えもようやくおわり緑濃く、生き物たちで賑わっています。本当にまるやまで全国津々浦々からのいろいろな方々と出会い、田の神様に感謝するなど夢にも思っていませんでした。

さて『住む』ということと『研究する』というテーマを抱えたひよこ組のみなさんですが、わたしにとっては『住む』は『生きる』と同じことなのかなとかんじています。あまり先の事は正直考えていません。よく集落の人に『あんたずっとここに住むつもりか?』と聞かれます。そんな時『家もつくってる最中で(未完成)他に行くところもないから取りあえずは、今日はいますよ。』と答えています。一生ここにいて、骨を埋めるか等と言われても、実際先の事はどうなるか分からない。明日死ぬかもしれないし、何か運命的な出会いがあるかもしれないのですから。けれども今、この瞬間ここに居る事は動かしがたい事実で、ここで自分にやれることをやるより仕方ありません。

この人間か、外の人間か、いずれここを去る人間か。わたしはどこから来てどこへゆくのか。そんなことをアメリカと日本、東京と能登をいったりきたりしながら探していて、結局どこにも青い鳥はみつけれませんでした。

集落の人の『ずっとここに住むつもりか』という質問の中の『住む』は『責任を持つ』と同じ意味をもつのではないかなと感じています。『おまえはここで一緒に草を刈り、雪をすかし、土を耕し、恵みを祭り、人を送り出すことに責任を持てるか?』ということです。とっても胸はって『はい。』等と言える自信はないのですが、ここから逃げ出して東京に帰ったと

しても、アメリカにいったとしても、もうその責任からは逃れようもない気がします。

何世代かかけて便利さを追い求めつづけた都会人が見ないふりして来たものを、今その代表としてわたしが向き合っている。日々、いろいろ気付いたり、発見したり、感動したりしている事を、ひとりで感じているのはもったいなかったり、誰かと共有したいから、わたしの後ろにいる、まだ便利な国にいる『昨日のわたし』の友達へ伝えたいと思います。またそんな集落にとっては異物なわたしを見て、わたしの後ろにいる都会の人々をまるやまの周りの人々に感じ取ってもらえればとまるやま組をひらいています。

まるやまのまわりで土地に根ざして暮らすと言う実験をして、ここを内側から見る目を養うことができる。豊かな自然をモニタリングする事で客観的に外側から、まるやまの立ち位置を知ることができる。そのふたつの目ある事で何故だかわたしは、ここに今生きる事にとっても自信が持てる様になりました。いえ自信というよりどっしり肝が座ったような気持ちというほうがいいかもしれません。どうしてかなと思うとたぶん、マチに住んでいた頃の『ココはドコ?ワタシはダレ?』状態から『わたし、いま、まるやまにいます。』と断言できるからでしょうか。

とりとめのない話になってしまいましたが、ひよこ組のみなさんがそれぞれの場所でかけがえのない今を積み重ねられることをニッポンのはずれからお祈りしています。

2012 年 夏至 まるやま組 萩のゆき

編集後記

能登フィールド研究会では、各地のレジデント型研究者の方々に会うことができましたが、皆さんの立場、動機、役割、成果…どれもが多様で「曖昧」であることを実感させられました。私自身はレジデント型研究者ではありませんが、レジデント型研究者とは何者なのか、地域社会にとってどんな意義があるのかを、今後も皆様の活動から考えさせてもらえたら、と思っています。(寺林)

雪景色の田んぼが、もうずっと遠い世界に感じられるような季節になってしまいました。「ひよこ組」の産声であるこの報告書は、初めての編集作業にまごまごし、少しだけ難産となりましたが、おかげさまで無事に生まれてきてくれました。

迷った時、折れそうになった時に思い返して、もう一度前を向けるような経験が、「ひよこ組」から生まれたらいいなあ。これからも、それぞれの地での奮闘を信じて、学びあい、励ましあえる仲間でありたいと思います。(清水)



発行：2012 年 6 月

発行者：地域環境学ネットワーク 若手 WG「ひよこ組」

(〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所内 地域環境学ネットワーク事務局)

この報告書は、JST-RISTEX 研究開発プロジェクト
「地域主導型科学者コミュニティの創生」の支援を受けて作成されました。